

理想のために戦う

イングランド

現実のために戦う

イタリア

そしてイタリア人と共に戦う

日本人

‘The Italian Job’

著 ジャンルカ・ヴィアリ、ガブリエル・マルコッティ

監修 田邊雅之

に戦う
イングランド、
現実のために戦う
イタリア、
そしてイタリア人と共に戦う
日本人

‘The Italian Job’

著 ジャンルカ・ヴィアリ、ガブリエル・マルコッティ

監修 田邊雅之

理想のために戦うイングランド、現実のために戦うイタリア、そしてイタリア人と共に戦う日本人

‘The Italian Job’

©Gianluca Vialli and Gabriele Marcotti 2006

2013年 6月 4日 第1刷発行

著者 ジャンルカ・ヴィアリ、ガブリエル・マルコッティ
監修者 田邊雅之
発行人 土屋 徹
編集人 芳賀靖彦

発行所 株式会社 学研教育出版
〒141-8413 東京都品川区西五反田2-11-8
発売元 株式会社 学研マーケティング
〒141-8415 東京都品川区西五反田2-11-8
印刷所 中央精版印刷株式会社

この本に関するお問い合わせ

【電話の場合】

- 編集内容についてはTEL03-6431-1602（編集部直通）
- 在庫、不良品（落丁、乱丁）についてはTEL03-6431-1201（販売部直通）

【文書の場合】

- 〒141-8418 東京都品川区西五反田2-11-8
学研お客様センター「理想のために戦うイングランド、現実のために戦うイタリア、そしてイタリア人と共に戦う日本人」係
- この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。
TEL03-6431-1002（学研お客様センター）

Printed in Japan

本書の無断転載、複製、複写（コピー）、翻訳を禁じます。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても、著作権法上、認められていません。

複写（コピー）をご希望の場合は下記までご連絡ください。

日本複製権センター TEL03-3401-2382

☐（日本複製権センター委託出版物）

学研の書籍・雑誌についての新刊情報・詳細情報は下記をご覧ください。

学研出版サイト <http://hon.gakken.jp/>

第一部 フットボール選手

第1章

最初のキック……………	16
変わりゆく時代…豊かさの犠牲者……………	23
歴史の流れには逆らえない……………	27
フットボールにおける階級格差…イングランドだけの現象なのか？……………	29

第2章

幼い頃にかけられる篩……………	39
「才能」か「環境」かについて……………	43
テクニクかやる気か……………	49
ヴィアリの四辺形…フットボール選手の四つの要素……………	53

第3章

命令に従う小さな兵士…私がどのような道を歩んできたか……………	65
私を導いてくれた人達……………	67
スキルを教えるが、価値観は教えない……………	76
将来の能力を予測する判断材料として頼りにならないもの…ユースのフットボール……………	84

「寒さじゃなくて」風だよ・天候が選手に与える影響

91

第4章

二人のボクサー

97

フットボールにおける頭の良さ

102

権威との接し方

110

イタリア型大学とイングランド型小学校

117

合理的なラテン系と、非合理的なアングロサクソン系

122

第二部

監督

第5章

誰でもできる仕事？

134

指導者はどこからやって来るのか？

138

最前線に放り込まれて

143

学校で何を学ぶのか？

149

またしてもその男：チャールズ・ヒューズの遺産

156

第6章

2500年の伝統を持つ戦術

167

4-4-2というドグマ

174

柔軟になることを学ぶ.....191

第7章

弾丸を食らうこと.....201

クビになった監督達…再利用か、焼却か？.....206

良い監督には何が必要か？.....214

外国人に注意.....231

私の監督としての妄念.....235

第三部 その他の人々

第8章

大金を追いかけて…スコアをつけるための手段？.....240

ボスマン判決後のパワーバランス.....244

いくら払うべきか？.....256

代理人…すべてを可能にする男達.....261

私自身の経験.....262

うますぎる話だと思ったら.....266

芯まで腐って…賄賂システム.....267

我々は何者で、どう映っているのか.....273

第9章

審判：このゲームを救うためにいる存在？

我々に対して囁かれる暗い陰謀説

イタリアの審判、イングランドの審判

ルールブックに固執して

もしマキャベリが監督だったら、不平の多い人になっていただろうか

いくつかのささやかな提案

279
288
291
295
304
307

第10章

好循環？ いかにしてフットボールとメディアはお互いを利用してきたか

調査をする人と、ストーリーを語る人

人々の求めるものを与える？

イタリアとイングランドを隔てる壁

検証

314
317
318
328
330
340

第11章

酸素不足：落ち込むイタリアの観客動員

ドラッグを服用した傭兵達とティズニーの体験

349
368

第12章

非合理的で無条件の愛

彼らは普通の人達

379
389

ウルトラス…独自のリーグに身を置いて……………394

第13章

普通の人間には耐えられないこと…昔ながらのイングランド的マネージャーの消失……………402

フットボールの夢を売ること……………409

「ロド・ペトルツチ法」…被害者のいない犯罪?……………417

フットボールの新たな支配階級を創り出す……………423

テレビ…敵か味方か、チェンソーか……………426

結論……………433

あとがき……………437

第四部

**変わったイタリア、変わらぬイングランド、
そして変わりゆく日本**

第14章

天国と地獄。激動を乗り切ったイタリアのフットボール界……………448

変わったイタリア、変わらぬイングランド……………452

グアルディオラとモウリーニョの時代……………458

私を魅了した日本と、同胞人ザツケローニ……………463

ザッケローニに見るアリゴ・サッキ的な要素……………	466
ザッケローニが目指すスタイルと、日本代表の可能性……………	468
新たなステップアップと、心躍る未来のために……………	471
謝辞……………	475
日本語版あとがき……………	477

共に戦う
イングランド、
現実のために戦う
イタリア、
そしてイタリア人と共に戦う
日本人

‘The Italian Job’

著 ジャンルカ・ヴィアリ、ガブリエル・マルコッティ

監修 田邊雅之

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

理想のために戦うイングランド、現実のために戦うイタリア、そしてイ
タリア人と共に戦う日本人

TRANSWORLD PUBLISHERS
61-63 Uxbridge Road, London W5 5SA
a division of The Random House Group Ltd
www.booksattransworld.co.uk

THE ITALIAN JOB
A BANTAM BOOK: 9780553817874
First published in Great Britain
in 2006 by Bantam Press
a division of Transworld Publishers
Bantam edition published 2007

© Gianluca Vialli and Gabriele Marcotti 2006

本書は2006年に初版、続いてペーパーバック版が発行された“The Italian Job”の日本語版にあたる。初版の刊行から年月が経っているため、本来であれば事実関係を更新するところであるが、膨大な注や補記が入り読みにくくなってしまふこと、一つの時代考証的な資料としての有用性を尊重したこと、そして論旨の大部分が現在にも十分当てはまるという判断から、注による補記や事実関係の更新は最小限にとどめるものとした。また日本語版の出版に向けて新章を追加したことや、日本の読者にとっての読みやすさを優先したため、適宜ボリュームの調整を行っている。ご留意されたい。

●著	ジャンルカ・ヴィアリ、ガブリエル・マルコッティ
●監修	田邊雅之
●翻訳	臼居直行
●カバーデザイン	武本勝利 (LYCANTHROPE Design Lab.)
●カバー写真	アフロ
●誌面デザイン	宮永真之
●組版	エストール
●製作管理	北澤直樹
●編集協力	岩崎美穂
●編集	水野春彦

本書を我々の家族に捧げる。そしてフットボールを情熱的に、真摯に、誠実に愛する人々、今日美しい姿を見せているこのスポーツが、明日にはさらに良くなると信じているすべての人々に捧げる。

序文

この本を読むことで、皆さんには私と一緒に旅に出ただくことになる。好奇心からスタートし、実に二年半もの貴重な年月を費やすことになった旅だ。

だが、私がたどり着こうとしていた目的地を考えれば、二年半はそれほど長い時間ではない。私はフットボールの真髄を探ることを目指していた。

私は身体能力を天から与えてもらい、この素晴らしいスポーツで生計を立てることができた。また身体能力を活かし、フットボールの世界でキャリアを築いていくだけの精神的な強さも授かった。

それでもフットボール界に二五年間も身を置く中で、私は答えより疑問の方を多く抱くようになった。私と同じような立場で、このスポーツについて深い疑問を自らに問うようになった人は他にもいたはずだ。仮に答えを導くことはできないにしても、いくつかの疑問について議論を試みることは、私にとって至極当然のことのように思えた。

私には非常に有利な点が三つあった。限らない好奇心を持つこと、立派な大義名分があること、そして現在のフットボール界で、最も優れた知性を持つ人々に接触する手段があることだ。

この本は、まさにその通りの内容になっている。フットボールについてもっと知りたいという私の渴望。ガンと筋萎縮性側索硬化症と戦うための資金を募る、基金をサポートしたいという願い。そして私が知る、最も聡明な人々から知恵を拝借すること。本書には、これらの要素が凝縮されている。

この本は自伝ではない。秘密の暴露もなければ、控室やピッチ上で交わされた言葉をめぐる物語もない。

むしろ私がイタリアとイングランドの間を行ったり来たりしながら様々な人と会い、フットボールや人生、火星や金星に関する話題まであらゆることを語りながら過ごした、30か月の記録である。

監督や選手、審判など、私の知り合いの中でも最も忙しい部類に入る人々は、貴重な時間と知恵を提供してくれた。今回の取材では、多くの人が極めてシンプルなスポーツだと考えているフットボールを、これらの人達と一緒に解剖していく作業を度々行つた。

我々はまず、フットボールの基本的な構成要素である選手について触れる。彼らはどこから来たのか？なぜイタリアとイングランドの選手は違うのか？我々は選手達にどう教えれば良いのか？我々はいかにして彼らをより良い選手に育てることが出来るのか？

次には、すべての要素を束ねる監督とコーチだ。我々はどうのようにして自分達の監督を選んでいるのか？監督を首にする決断は、いかに下されるのか？監督達は、なぜ特定の戦術を用いるのか？

最後に第三部では外部の要素、すなわちフットボールを特別な存在たらしめている「その他」の要因を検証する。金と代理人、審判、観客、メディア、クラブ、運営組織などはフットボールに色彩を与え、我々とフットボールとの関わり方に影響を及ぼしている。

取材を始める前よりも、自分のフットボールに関する知識は豊富になっただろうか？イエス。イングランド人やイタリア人を、より理解できるようになったか？もちろん。疑問を投げかければ投げかけるほど、さらに別の疑問が生まれ、結局は未解決の問題ばかりに取り囲まれていた哲学者の一人になったような気分はするだろうか？少しだけ。だがそんなことはどうでもいい。これは最高の旅だった。さあ一緒に出発しよう。

ヴェロニカとマリーと自分…フットボールの三角関係

フットボールとは愛であり情熱だ——フットボールに抱く感情は、女性に対するそれに似ている。フットボールと共に人生を歩む人間は——ファンであれ選手であれ、クラブの役員であれ審判であれ、あるいは監督であれグラウンドキーパーであれ——最終的にはどうしようもないほど深い恋に落ちることになる。だがイングラウンドとイタリアはまるで別世界だ。そこには全く違った種類の愛情がある。

私が二つの国のフットボールに対して抱く思いは、二人の女性に対して抱く感情に似ている。マリーとヴェロニカだ。

一人目のマリーは誠実で陽気。気が休まるタイプの女性だ。生まれつきの美人ではないかもしれないが、一緒にいれば、彼女は自分が持っているすべてを与え、格別な気分にしてくれる。もう少し彼女が外見を気にすればいいのと思うこともある——ジムで数時間過ごしてみるとか、チェーン店のジーンズにトップスを合わせる代わりに、エレガントなドレスを着てみるとか、少しばかり化粧をしても似合わなくはないはずだ。

どれだけ仲が良い男女にも口論はつきものだが、彼女と口論になってもすぐに終わる。こちらを許し、水に流して忘れてくれようとするのだ。彼女は良い時のことしか覚えていないため、昔の出来事を掘り返してあなたを責めるようなこともしない。彼女と愛を交わす際には、短くても濃厚な時間が流れる。彼女は気後れしないし、全身を使ってあなたを喜ばせてくれる。

朝に彼女と別れてきり何日も会わないこともあるが、彼女から連絡をしてこなくても、正直、あなたは気にならない。それほど頻繁に彼女のことを考えるわけではないからだ。というよりも、彼女と最後に会った時の

ことはあまり考えず、次に会う時のことを頭の中であれこそ夢想するというのが正しい。

マリーは素朴で率直な女性だ。自分の考えていることをそのまま口にするし下心もない。いわゆる隣の家に住んでいる女の子タイプ。彼女のもとにはいつでも戻って来られるし、両手を上げて歓迎してくれることがわかつている存在だ。たとえ束の間だとしても。彼女はあなたをいつでも満足させてくれる存在なのだ。

他方、二人目のヴェロニカは、情熱的で虚栄心が強く、嫉妬深い女性だ。彼女は目を見張る程の美人で、自分でもそのことを自覚している。実際、彼女は自分の美しさを利用して、人を酔わせて操ることもする。彼女は、あなたをつなぎとめるために必要最低限のものしか与えてくれない。しかも不安感につけ込み、あなたの心を混乱させる。彼女は細かいことへのこだわりが異常なまでに強く、完璧なメイクをしてエレガントに着飾り、常に艶やかで魅力に満ちている。

彼女との関係は決して一筋縄にはいかない。彼女はあなたを失望させ、無視し、裏切る。彼女と一緒にいても幸せな気持ちはほとんど味わえないのに、それでもあなたは必ず彼女のもとへ戻ってしまう。彼女との逢瀬を教時間で済ませることなどはできない。彼女の魅力に囚われたまま、一分が一時間に、一時間が一日へというように、いたずらに時間は過ぎていく。あなたは逃げ出すことができないのだ。彼女と会う直前はいつでも、あなたは引き裂かれるような気持ちになる。頭の中のすべての神経細胞が心理的な内戦を始めるのだ。あなたは、何が起きるのかを正確にわかっている。彼女は間違いなくあなたを無碍に扱い、侮辱し、また失望させるだろう。だがあなたは、彼女のところに戻らずにはいられない。彼女に実際に会う頃には、あなたは既に抜け殻になっている。彼女と密通することに思いを馳せ、苦悶と精神的な葛藤に散々苛まれていたからだ。

だが密通が終わっても、あなたは単純に立ち去ることができない。喧嘩をしたときは特にそうだ。彼女はあ

らゆる物言いと振る舞いを事細かに分析し、しばらく忘れていた疑惑まで蒸し返す。彼女は決して過去のことを忘れないし、相手も許すこともほとんどない。

ヴェロニカは気分屋で怒りっぽく、いつでも人を騙そうとする。稀に物事がクリアーに見えている時には、あなたは彼女との関係をもう終わらせ、不健康で息が詰まりそうな束縛から、自分を解放してやることを考える。だが、結局はいつもよりを戻してしまう。自分でもどうしようもないのだ。

イングランドのフットボールと、イタリアのフットボール、どちらがマリーで、どちらがヴェロニカに当たるのか。あなたがこの本を読み終える頃には、それがわかるようになっていく。